



Title	到来する暴力の記憶の分有台湾先住民族タイヤルと日本における脱植民化の民族誌記述
Author(s)	中村, 平
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47111
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	中 村 平
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 20784 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	到来する暴力の記憶の分有：台湾先住民族タイヤルと日本における脱植 民化の民族誌記述
論 文 審 査 委 員	(主査) 助教授 富山 一郎 (副査) 教 授 杉原 達 教 授 川村 邦光

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、台湾先住民族であるタイヤルの人々が自らの歴史を主体的に獲得していくプロセスを、長期にわたる人類学的フィールドワークを通して考察するものである。自らの歴史を主張し語りだす行為の中では、かつての植民地支配や被った暴力の経験が断片的に想起され、再構成されながら提示されているのであり、本論文はこうした想起された記憶を、語りだされたその場にそくしながら記述している。以下その要点を、論文構成に言及しながら、述べる。

まず、第 1 部の第 1 章、2 章においては、本論文の方法論が展開されている。本論文においては、聞き取り調査により人々の記憶を再構成する作業において、聞き手である自分自身の存在や聞き取り調査が調査対象社会に及ぼす影響を、問題化している。言い換えれば、聞き取り調査をおこないながら調査行為それ自身をも批判的に再考していくという、内省的なフィールドワークをめざしているのである。こうした方法論にもとづき本論文は、調査者である自分ならびに自分が所属する日本社会と、被調査者であるタイヤルとの関係性を、文字通り密度の高い聞き取り調査において、考察する。

第 2 部の第 3 章では、2000 年に成立したタイヤル民族議会における自治要求、アジア太平洋戦争時に「高砂義勇隊」として動員された人々の靖国神社合祀をめぐる争われた台湾靖国訴訟と立法委員である高金素梅（タイヤル名チワス・アリ）の活動、あるいは 2006 年に建設された「高砂義勇隊」を顕彰する碑の碑文をめぐる論議をとりあげながら、それぞれの主張における歴史意識と植民地支配の記憶を、個的な関係における記憶の中で考察している。ここでは政治的な声明と個的な記憶が折り重なっている状況が示されると同時に、公的に表明される政治主体には必ずしも帰着しない、聞き取り者自身をも含みこんだ植民地支配の記憶をめぐる関係性が、遂行的に見出されている。

第 2 部の第 4 章と第 5 章では、植民地支配の記憶が語りだされる個別の状況を記述しながら、日本の植民地支配を考えるうえできわめて重要な、「帰順」という問題に焦点を絞っている。ここでは和解を示すタイヤル語の「スブラック」、頭目を示す「ムルフー」の言葉の意味の植民地支配を契機とした重層的な変遷を検討しながら、「帰順」が武装解除でしかなく、決して降伏を意味しない歴史の記憶として確保されていることが、説得的に示されている。すなわち、いまだ降伏していない植民地支配の記憶の中で、「スブラック」、「ムルフー」という言葉が登場しているのであり、言い換えればそこには、現在もお鎮圧が継続しているという歴史認識が存在している。こうした密度の高い人類学的フィールドワークにより、本論文全体としては、現在の自治要求をはじめとする政治が、植民地支配にかか

わる記憶の想起と共にあるということ、そしてそうであるがゆえにこうした政治が、かつての植民地支配の責任という問題と密接にかかわっていることが、具体的に明らかにされている。そしてこの責任という問題を、本論文では、記憶が言葉として語りだされた状況にいかなる記述を重ねていくのかという民族誌記述への問いとして、受け止めている。

論文審査の結果の要旨

ジェームズ・クリフォードらが批判したように、伝統的な社会人類学においては、調査者である人類学者と被調査対象の関係性については明示的に議論されなかったが、その一方で、クリフォードらの批判的人類学は、聞き取り調査を権力的関係に無頓着な行為として否定するあまり、社会人類学が培ってきた密度の高い調査をおろそかにする傾向も生んできた。本論文の方法である内省的なフィールドワークは、こうした対立の中であって、批判的人類学を受け継ぎながらも、フィールドワークのもつ経験的な領域へのアプローチを継続する重要な試みであるといえる。またこうした方法により本論文では、経験的領域において語りだされる記憶とそれを聞き取る調査者との関係を、記述の中に遂行的に織り込んでいくというきわめて難しい民族誌記述に成功しているといっていよい。

とりわけこうした民族誌記述において明らかになった、和解をめぐる意味の重層性は重要である。すなわち本論文においては、和解が普遍的な言語により保持される契約ではなく、歴史記憶のたえざる想起を包含する継起的プロセスとしてあるということ、またこのプロセスの中であって和解は、不断に亀裂を呼び込むということが、タイヤルの人々の主体的な歴史を通して具体的に明示された。こうした和解をめぐる検討は、現在の歴史認識をめぐる様々な軋轢を歴史記述の問題として受け止めるうえで、きわめて大きな意義がある。

ただ、こうした具体的記述の一方で、方法論の理論的検討においては、議論の飛躍が少なからず存在している。また本論文がその新たな方法論として重視している、マイケル・タウシグの研究の批判的検討も、いまだ不十分である。さらに主要なテーマではないが、植民地近代という論点をめぐっても、それを限定された不十分な近代の展開という問題として理解するのか、あるいは近代自身の抑圧を問題しているのかという点において、若干の混乱が存在する。こうした理論的フレームワークにかかわる検討作業は、今後の課題として残されているだろう。あるいは具体的な記述をめぐるのは、タイヤルの人々の主体的な歴史意識と家族や親族をめぐる記憶の重なりにおいて、家父長的な関係やジェンダーが指摘されてはいるが、それがいかなる問題を派生させていくのかについては、展開されてはいない。

以上のような多くの課題は浮き上がっているが、本論文の長期にわたるフィールドワークもとづいた分厚い研究の意義がそこなわれるものではない。また、理論的な課題においても、本論文はこうした課題にとりくむ大きな端緒を、複数提示している。よって本論文を、大阪大学文学研究科の博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。